＜　分野を超えた教員の連携による長崎県立大学版サービス・ラーニングプログラムの確立―共生をテーマにした取り組み　＞

研究年度　令和　3 年度
研究期間　平成 31 年度～令和 3 年度
研究代表者名　橋本優花里
共同研究者名　岩重聡美・高　芳・名切元貴美子・芳賀普隆

Ⅰ．はじめに

社会から大学教育への要望の一つに社会人基礎力の育成がある。これは単なる基礎学力や専門知識の獲得からだけでは醸成されない。社会人基礎力の醸成には培った知識の活用・応用が必要であり、そのためには 2008 年の中央教育審議会（答申）にも示されているように、学生に目的意識を持たせ、地域や産業との連携を深め、質の高い体験学習の機会を設けるような開かれた教育活動が重要である（飯田、2018）。そのような体験学習には、ボランティア、インターンシップなどが代表として挙げられるが、本研究ではサービス・ラーニングに着目した。サービス・ラーニングの表記については、サービス・ラーニングとするものや、サービスラーニングとするものがあるが本稿では、サービス・ラーニングに統一する。

サービス・ラーニングとは、「サービス（貢献活動）とラーニング（学習）をつなげ、ボランティア活動を学外で行い、その活動体験を通して学びを獲得することを目指す教育（村上、2007）」である。米国の大学では比較的良く行われている教育手法であり、各大学において特色ある内容が展開されている。本学では長崎県ならではの課題である離島振興を核にした「長崎のしまに学ぶ」という問題解決型学習が全学的に展開され、社会人基礎力を醸成する手法として一定の評価を受けている。またこの他にも、全学に導入されたインターンシップや海外ビジネス研修など、様々な体験学習が展開され、学生が培った「基礎学力」「専門知識」を活用・応用する機会が設けられている。しかしながら、各プログラムにおいては学生が社会とかかわるうえでの基礎的なマナーや能動的な行動力の不十分さを指摘する声が聴かれるのが現状である。そこで、本研究では、「長崎のしまに学ぶ」やその他の体験型学習の前後をつなぐ教育プログラムとしてサービス・ラーニングプログラムを確立したいと考えた。その際、高大接続の観点や専門に閉じないコモンセンスを共有し、それらを教育に生かすため、学部を超えた教員団を構成した。そして、共生という大きな枠組みのもと、1）地域との共生に基づく地域課題解決、2）自然環境との共生に基づく環境保全、3）人種を超えた共生に基づく異文化理解の 3 つの分野でのサービス・ラーニングの在り方について検討を進めた。

本研究は 3 年間の計画で進められており、今年度は最終年にあたった。今年度は 1）については、大学近隣のゴミのポイ捨て問題解決に向けた取り組みを、3）の分野については観光地での外国語表記の整備に関する取り組みを行った 2）については、これまでと同様に実践経済学科の芳賀先生による 2 年生の基礎演習と 3 年生の専門演習としての取組みを行った。

Ⅱ．活動内容

１．地域との共生に基づく地域課題解決（担当：橋本、岩重、高、名切元、芳賀）

今年度は、公共政策学科の「公共政策実習」における教員プロジェクトの一つとして参画した。サービス・ラーニングのテーマについては、昨年度行った大学近隣の地域住民のニーズ調査をもとに、参加学生同士で話し合った上で、相浦地域のゴミ問題の解決策を市役所に提案することとなった。

（1）活動の経過

2021 年 5 月下旬に公共政策実習の受講生の中で参加に興味を持っている学生を対象に説明会を行った。その結果、6 名のメンバーが参加することとなった。

第 1 回目のミーティングについては、コロナ感染症拡大に伴い学内外での活動が制限されたため、6 月下旬にオンラインでの開催となった。第 1 回目はオリエンテーションとして、メンバーの自己紹介や活動の趣旨の確認を行ったうえで、リーダーを 1 名選出した。2 回目以降のミーティングは感染状況が落ち着いたため対面での実施とした。2 回目のミーティングでは、昨年度行った大学近隣の地域住民のニーズ調査の結果を KJ 法により分類し（図 1）、その中から今年度の活動のテーマ「相浦地域のゴミ問題の解決」を決定した。以降は対面でのミーティングを毎週行ったが、8 月下旬には再びオンラインでのミーティングに切り替えることを余儀なくされた。

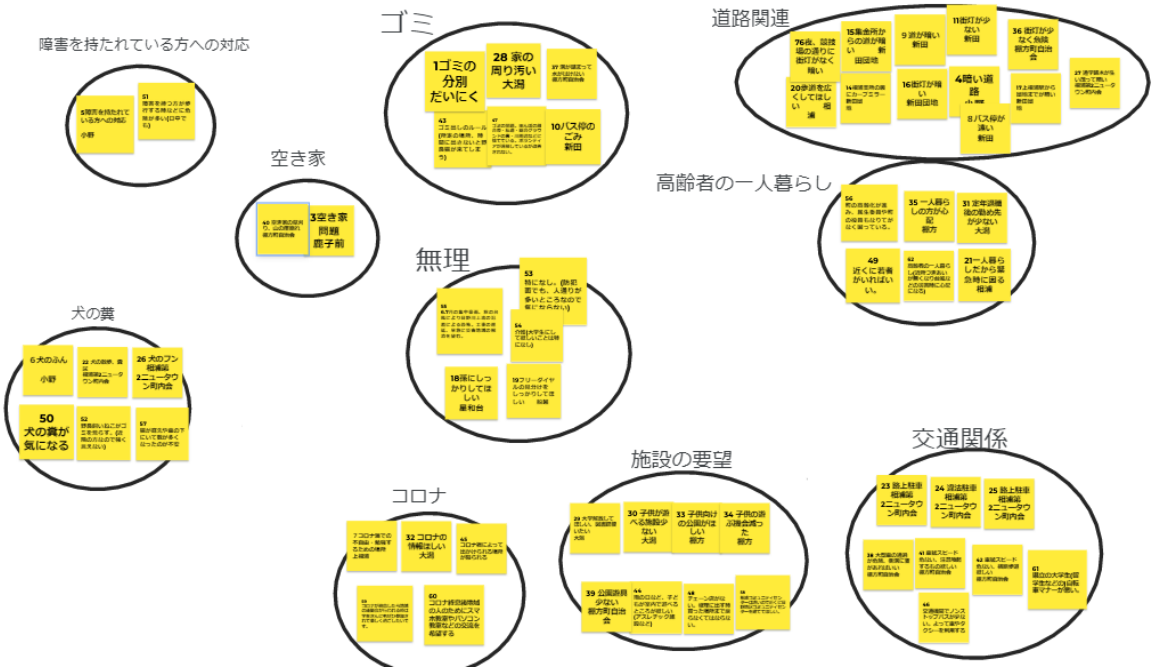

図 1　地域のニーズに関する KJ 法による分類

複数回のミーティングを経て、まず、7 月下旬から 8 月初旬に学生が自ら地域に足を運んで調査することとなった。調査にあたっては地区を 3 か所に分け、ゴミが多く落ちている場所、注意を促す掲示物の有無、ごみの種類を調べることとし、ゴミが多いところは写真に記録した。学生の活動への指導は、主にリーダーとのメールのやりとりと Google

Classroom を介してのメッセージの送受信で行った。調査の結果は 8 月下旬に報告がなされ、その後解決策の提案について検討を進めることとなった。

(2) 活動の結果

参加した学生は調査結果を踏まえ、市役所にごみのポイ捨対策の提案を行いたいと考えており、提案内容が書面で示された。しかしながら、ゴミ問題に着目した理由やまた対策の提案の根拠や実現可能性が十分に検討されているとは言い難かったため、書面上での指導を継続した。また、提案に先立って教員への報告会を行うこととなったが、報告者の一人が当日の都合が悪くなったという連絡があった。代わりのメンバーで行うよう促したが、学生は士気が下がっているようで、報告書の提出のみとなった。

(3) 活動の振り返り

本活動は公共政策実習の「教員プロジェクト」の一部として位置付けられている。公共政策実習を担当した教員からは「公共機関や地域社会への課題に取り組む」ということが伝えられていたが、その位置づけが参加した学生と、プロジェクトを提供した我々の間に意識のずれがあったように感じる。特に、プロジェクトを提供した我々は、教員が立ち上げたプロジェクトに、学生を従事させるという位置づけで、教員は学生の活動を指導する立場になると考えていた。一方、学生は、調査の実施に当たっては、学生主導で自主的に行い、教員はあくまでもアドバイザー的な立場であるという認識であったことがうかがえた。実際、メンバーの一人からは、自分たちが行うプロジェクトであり、教員からの指導を積極的に受けることは考えていないというような発言もあった。本活動の位置づけについては公共政策実習の担当者にも確認しながら進めたが、最後まで学生と教員の認識のずれは埋まらなかった。

また、本活動では前年度と同様にリーダーを決め、リーダーを介したやり取りを行ってきたが、リーダーとの連絡が滞ることが多々あった。それがリーダー自体の問題なのか、リーダーとメンバーの問題なのか、あるいは両方になるのか、リーダーには色々尋ねてみたものの、最後まで不明であった。リーダーからの積極的な質問や働きかけがなく、教員がその都度何度も連絡をしなければいけないような状況であった。

以上のように、本活動は最終的な成果が十分に得られない内容となった。当初はそれなりに意欲的に活動していたように感じられていたが、学生の活動について指導を行うごとに学生のモチベーションが下がっていったように感じた。活動が始まってしばらくするとオンラインでの交流しかできなくなるなど、学生と教員の信頼関係が十分に築けないまま指導を進めたことがその原因の一端であると考えられる。学生との交流をしっかりおこない、ラポールを形成したうえで取り組むべきだったと反省している。

２．人種を超えた共生に基づく異文化理解（担当：岩重、高、名切元、橋本）

2021 年度、経営学部国際経営学科岩重ゼミの有志と 1 年生 2 人の計 4 人で、「長崎観光地における外国語表記プロジェクト」を実施した。

このプロジェクト（以下 PJ）の目的は、長崎県内に、適切な外国語表記があるべきところに設置されるように提案することで、県内在住の外国人や外国からの観光客が、さらに安全に

快適に過ごせる観光施設づくり（環境整備）を行っていくこと。そして、この目的の元、達成したい目標として、観光施設でのフィールドワーク（以下 FW とする）で調査した外国語表記を分析し、適切でより分かりやすい表記とテンプレートを作成、各施設に提案することを設定した。対象とした施設は、長崎県原爆資料館、出島、グラバー園、長崎新地街の４か所であった。

本 PJ での調査および分析では、適切でより分かりやすい外国語表記とそれに見合ったテンプレートを作成、そしてそれらを各施設へ提案することを目的と実行した。ここまでかかった期間はおおよそ半年間。その結果、この PJ にご協力いただいた多くの機関（長崎県庁国際観光振興室の方々や長崎県内の旅行会社社長様など）からは、非常に有意義な調査であり、観光施設などに学生作の表記やテンプレートなどを配布する予定であること、また、この表記方法を今後も県内に横展開することなどについてのご提案をいただいた。

この PJ では、この計画を進めるにあたり関係各位と複数回の打ち合わせなどを実施した。長崎県庁文化観光国際部　前川政策官をはじめとして多くのスタッフの方々や、県内で旅行会社を経営しておられる山田氏、また、長崎市内の観光地でのご担当の方々である。PJ を進めるにあたり、まず初めに、学生を中心として県庁の方々・山田氏・本学教員との顔合わせを目的としたオンライン打ち合わせを行い、その後、県庁での打ち合わせのためそちらへ出向き、同じメンバーでの対面での打ち合わせと意見交換会を行った。この場では、学生が、計画に沿いながら進めている状況を説明しながら、互いの立場から意見交換などを行った。ここでは非常に貴重な意見が多く出された、当初は外国語表記の修正（外国語誤表記を適切な表記へ修正する）などを主目的として進めていたのであるが、それでは観光施設に迷惑がかかるだろう、もう少し広い意味での外国語表記に対する提案が望ましい、との県庁からのご意見をもとに、「観光地における適切な外国語表記」へと修正した。学生たちにとり、このような外部の方々との打ち合わせや会議、さらには意見交換など今まで全く経験がなく、その場にいる事だけでも緊張の連続に違いないのに、そこで、急な軌道修正を求められた際の対応は、これ以上ない緊張したなかでの発言などであったと推測する。そばでそのような学生たちを見ていると、教員も手を差し伸べたい気持ちはやまやまであったが、あえてそうはせず学生たちに任せた。学生たちは、瞬時によく考え、自分の考えを自分の言葉でしっかりと伝えていた。この経験こそが、まさに、サービス・ラーニングそのものであったと確信している。また、引き続いて、観光施設の方々とのやり取りや、PJ メンバー間での調整、県庁ほかとの連携をうまくこなしながら最終地点まで到達できたことは、学生たちの今後の大きな自信につながったと思う。この PJ は、県庁や観光施設などの方々から高い評価を得ることができた。その結果として、先にも述べた通り、今回学生作成の外国語表記やテンプレートには、大学の校旗を入れ各観光施設へ配布・設置されることとなった。また、この動きは長崎市内だけにとどまらず、広く県内にもこの動きを進めるとのことである。そして、学内では、この PJ に引き続き、「長崎県内の外国人の生命と心を守る運動」にその活動を広める計画があり、県庁からは、ぜひ本学学生にこの PJ に参加してほしいとの強い要望をいただいている。

長崎は、その昔から外国人に門戸を広く開放し、多くの外国人へはおもてなしの気持ちで接してきていた。まさに、古来よりの多様な長崎で多様な人々への多様なサービスを提供するこ

とが今後の長崎県にとってもあらゆる意味で多くの利益をもたらすであろう。今回のサービス・ラーニングを通し、学生たちの主体的で積極的な学びと活動が、今後の長崎をさらに多様にしていく一助になったことはこの活動の大きな成果と言えよう。

３．自然環境との共生に基づく環境保全（担当：芳賀）

(1) 地域プロジェクト活動の趣旨及び実施の背景

地域プロジェクト活動は、2019 年度　長崎県立大学地域創造学部実践経済学科 2 年生　基礎演習・芳賀ゼミ（5 名）のゼミ活動において、地域実践の観点から新たな試みとして開始された。地域プロジェクト活動とは、ゼミでの調べ学習及びフィールドワークを通して地域の環境問題など地域課題を発見するとともに、学生の視点で考え、調べ、まとめることで地域貢献につなげていく、学生提案型のゼミ活動のことである。長崎県立大学の周辺地区や相浦川周辺（大学周辺）について知ることで、環境の視点（水環境改善など）から魅力的な地域にしたい、そして環境を学ぶゼミとして何か地域に貢献できることはないか、という問題意識から本プロジェクト活動を立ち上げた。

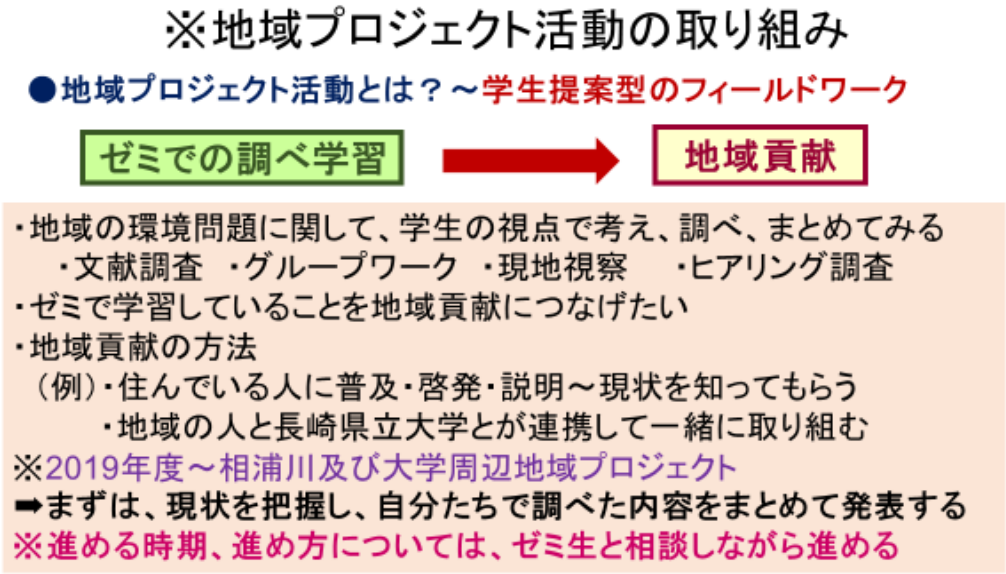

図１　地域プロジェクト活動の取り組みの概念

（出所）筆者作成。

ゼミにおける地域プロジェクト活動の取り組みを起案するに至った背景には以下のようなものがある。

第１には、環境を取り巻く社会・経済の状況である。

環境は人間にとってなくてはならない、人間生存の基盤そのものである。これまで拡大を続け、膨大な規模となった人間活動が一層の広がりを見せ、そのことが有限な容量の地球環境の中で営まれることで、多くの種類の環境問題をつくり出している。この人間活動の拡大が今後も継続し、それぞれが利便性あるいは物質的な豊かさを求めて拡大していくことになるならば、

環境影響のみならず、資源の枯渇など、人間の生存と発達の基盤が壊されてしまう。

「持続可能性」（サステイナビリティー、sustainability）という概念は、人間の生存と発達を危うくする環境問題、経済問題、社会問題の出現を背景に生まれてきた。それは、健康、安全という問題から始まり、地球環境の変化、有限な資源の枯渇問題に広がってきた。現在の人間活動の姿が「持続可能ではない」という理解が深まってきたことから、持続可能性は 1980 年代から認識されるようになってきた（植田・大塚編（2015））。

最近になって、その「持続可能性」をますます危うくする状況が地球上で発生している。

近年、毎年のように大災害が日本を覆う。夏になると「数十年に一度」の豪雨が、場所を変え、時間を変えて、局所的に日本各地を襲い、災害のつめ跡を残す。猛暑、酷暑で 40℃を超える高温が記録されたかと思えば、冷夏が襲うこともある。このような異常気象の大きな原因が、気候変動の影響と言われている（蟹江（2019））。国連気候変動枠組条約第 21 回締約国会議、COP21（※筆者注））では、2020 年以降の温室効果ガスの排出削減等に向けた取組を進めるための枠組みとして、パリ協定が採択され（環境省編（2020））2015 年採択、2016 年に発効、※筆者注）、脱炭素社会に向けて舵を切ったものの、取り組みに向けて第一歩を踏み出したに過ぎない。

また、地震や台風といった頻発する大災害により、停電が発生し、電気・水といったライフラインにも大きな影響を与えるなど、21 世紀の課題の多くが、地域でも直面している。さらに、負の連鎖が短期間に周期的に起こっている事例も頻発しており、問題が増幅され、解決が難しくなっている。

2015 年に国連総会で採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」は、その中核をなすものとして持続可能な開発目標（SDGs、Sustainable Development Goals（※筆者注））を提示している。SDGs は、環境、経済、社会の向上に係る 17 のゴール及び 169 のターゲットから構成される、途上国と先進国共通の持続可能な社会づくりを実現する目標である。17 のゴール、169 のターゲットが相互に関係していて、複数の課題を統合的に解決することを求めている。

こういった現状に対し、2014 年 12 月に、今後 5 カ年の目標や施策や基本的な方向を提示する「まち・ひと・しごと創生総合戦略」が取りまとめられた。さらに、2017 年 12 月に閣議決定された 2017 年改訂版においては、「地方創生の一層の推進にあたっては、持続可能な開発目標（SDGs）の主流化を図る」旨が記載された（村上他（2019））。

このような複雑な社会や地域課題に対して、本学で学ぶ学生、地域住民を含め、全てのステークホルダーが向き合っていかなければならない状況がある。

第 2 に、大学の教育と地域を取り巻く状況である。第 1 の論点でも前述した少子高齢化や災害からの復興など、大学教育と社会とをつなごうとする際、社会の側における様々な変化や新たな動向に、大学教育や大学生がどのように関わることができるのかを考えることが重要である。

とりわけ地域における環境問題に関しては、環境の機能論との関連でいえば、人間は、環境の自然資源供給者としての機能を破壊してしまったり、ごみ問題のように自然が同化・吸収してくれる容量の範囲を超える形で生じる環境汚染を引き起こす。また、歴史的建造物や町並み

の保存のような歴史的・文化的ストックは、私たちの生活の環境を構成しており、豊かさや快適さをもたらしてくれるが、そういったものを破壊する行為も、１つの環境破壊の１つの形態である。そもそも、環境とは主体を取り巻く周囲にあり、主体との相互作用の関係にあるものをいう。環境は私（たち）と相互作用の関係にあるため、環境を破壊することも、良い状態で保全することも、より良い環境を創造することも、私（たち）次第である。

私たち芳賀ゼミは、環境と人間社会との関わりを認識し、長崎県立大学で学ぶ私たちの周辺地域がどういう地域なのかについて実際に歩いて自分の目で見て、現場を通じて考え、歴史や文化、自然、生活といった観点から探究している。今回の報告書では、「環境保全からみた共生に関する取組み」ということで、大学周辺の相浦地域（川下地区、大潟地区、日野地区、椎木地区を含む）を中心に、川下地区のポイ捨てごみ問題、自然・歴史・文化からみた相浦川と地域とのつながり、大学生の防災意識に焦点を当てた活動や調査研究を行った結果を記した。足元にある地域資源や地域固有の良さを発見したり、地域において直面している課題について、参加する学生が活動を通して学びを深めると同時に、彼らが活動するコミュニティに対してどのような貢献をなしうるのか[1]を学生自らが考えることで、ゼミとして地域に根ざした取り組みに挑戦したものが地域プロジェクト活動である。この地域プロジェクト活動を通じて、この活動に参画した学生自身にも、大学周辺地域のことについて知ることで、学びを深めてもらいたいと願っている。

今回の報告は、地域課題の現状を整理した段階にとどまっているが、第１段階である地域プロジェクト活動の過去 3 年間（2019～2021 年度）の経緯と活動内容について概説する。この第１段階のステップを踏まえて、地域住民の方々や関心ある教職員、地方自治体の方々などに私たちの取り組みを知ってもらい、地域の方々と大学が協働・連携して新たな取り組みに発展させていく（第 2 段階）ことを構想している。

以下では、第１段階では、現在の地域プロジェクト活動の先駆けとなる活動を行った草創期（2019 年度）、及び 2 年生、3 年生の芳賀ゼミの活動として動き出した地域プロジェクト活動 2 年目及び 3 年目（2020～2021 年度）の活動内容について紹介する。

（2）これまでの地域プロジェクト活動の経過

草創期（2019 年度）

長崎県立大学における基礎演習 2 年生ゼミ全体の研究テーマとして、「歴史からみる相浦地域の変遷と相浦川の関係性」に取り組んだ。芳賀ゼミは「環境」を中心としたテーマで学びを深めてきた。その中で、相浦地域を環境の観点のみならず歴史的観点で捉えながら、どのような変遷を経て、今日の相浦地域が形作られたのかを解明していくこと、そして相浦地域の形成・発展と相浦川の関係性について着目して、地域資源としての相浦川を再発見したり、相浦地域を知り、何らかの貢献をしていきたい、と考えながらゼミ活動を行ってきた。基礎演習の芳賀ゼミの地域プロジェクト活動では、自分たちの学びを相浦地域の人々に知っていただく中で、ゼミ学生自身も相浦地域や相浦川、佐世保に親近感を持ってもらうとともに、地域住民の方々との協力・連携と交流を図っていく中で、住民の方々にも相浦地域と相浦川に愛着をもっ

[1] 福留（2019）p.123。

てもらうことを目的としている。この時期は、試行錯誤しながら地域プロジェクト活動のコンセプトを構築していった。

また、具体的な活動としては、**表** 1 にあるように、KJ 法を用いたゼミ生間の議論に基づく課題認識の共有やプロジェクト活動立案、相浦川周辺や相浦地区のフィールドワーク及び議論、関連文献の輪読や佐世保市や長崎県の県北地域などの歴史や自然、文化を理解するため、郷土史家を招いての勉強会も開催した。また、佐世保市環境部環境政策課主催、九十九島ビジターセンターのご協力を得て、九十九島における観察会（2020 年 3 月 8 日）を行い、この自然体感イベントに学生有志と教員の芳賀の引率のもとで参加した。地域の自然環境、水環境を全体として理解し、幅広く学ぶとともに、普段の大学生活の中で、なかなか自然に直に触れることのない学生たちに自然に触れる体験及び漂着ごみの実態も把握してもらい、一部は収集する作業も行った。

表１　芳賀ゼミ・地域プロジェクト活動の内容

時期	内容
2019 年度	**【基礎演習 2 年生】** ・プロジェクト計画の立案 ・相浦川周辺及び相浦地区のフィールドワーク （春季・冬季の計 2 回） ・フィールドワークを受けての議論 ・佐世保市の環境政策、相浦地域、相浦川、相浦地区の郷土史等の文献輪読（前期、後期の 2 回に分けて実施） ・佐世保史談会会長講演（郷土史専門家を招いての勉強会） ・自然体感イベントの参加（九十九島、学生有志及び教員）
2020 年度	**【基礎演習 2 年生】** **（後期：Q3・Q4）** ・地域プロジェクト活動の情報共有・相談 ・佐世保市の環境政策、相浦地域、相浦川について調べ、学生間で関連資料の輪読 ・相浦川周辺及び木宮町周辺のフィールドワーク（秋季） →その後、地域課題の洗い出し ・学生による自主的な調査の実施、調査結果の集計・集約 ・12 月 17 日：芳賀ゼミ 2 年・3 年合同の地域プロジェクト活動報告会において活動・調査内容の発表、意見交換 ・年度末～地域プロジェクト活動における 1 年間の取りまとめに向けての議論
	【専門演習 3 年生】 **（後期：Q3・Q4）** ・地域プロジェクト活動の情報共有・相談

	・佐世保市の環境政策、相浦地域、相浦川について調べ、学生間で関連資料の輪読 ・相浦川周辺及び木宮町、相浦地区にかけてのフィールドワーク実施（秋季）→その後、地域課題の洗い出し ・2 チームに分かれてグループワーク実施 →活動計画・調査計画の具体化、文献調査、フィールドワーク、アンケート調査の実施、調査結果の集計・集約 ・12 月 17 日：芳賀ゼミ 2 年・3 年合同の地域プロジェクト活動報告会において活動・調査内容の発表、意見交換 ・12 月 20 日：佐世保校合同ゼミ報告会にて活動・調査結果について発表 ・年度末～地域プロジェクト活動における 1 年間の取りまとめに向けての議論
2021 年度	**【基礎演習 2 年生】** **（前期：Q1・Q2）** ・地域プロジェクト活動の情報共有・相談 ・相浦川周辺のフィールドワーク（春季） **（後期：Q3・Q4）** ・地域課題の洗い出し、地域プロジェクト活動内容相談 ・2 グループに分かれてのグループワーク ：学生による自主的な調査の実施、調査結果の集計・集約 ・外部講師による講演 ・12 月 16 日：芳賀ゼミ 2 年・3 年合同の地域プロジェクト活動報告会において活動・調査内容の発表、意見交換 ・年度末：地域プロジェクト活動における 1 年間の取りまとめ、「2021 年度　地域プロジェクト活動報告書」作成に向けての作業実施～グループごとに調査レポート作成と発表資料修正作業実施
	【専門演習 3 年生】 **（前期：Q1・Q2）** ・地域プロジェクト活動の情報共有・相談 ・「長崎県立大学　地域プロジェクト活動報告書」作成に向けて、グループごとに調査レポート作成と前年度の 2 学年合同の地域プロジェクト活動報告会資料修正作業実施 ・前年度の活動内容をもとに、活動紹介の動画を収録 **（後期：Q3・Q4）** ・2 チームに分かれてグループワーク実施 →活動計画・調査計画の具体化、文献調査、フィールドワ

	ーク、アンケート調査の実施、調査結果の集計・集約 ・外部講師による講演 ・12 月 16 日：芳賀ゼミ 2 年・3 年合同の地域プロジェクト活動報告会において活動・調査内容の発表、意見交換 ・12 月 18 日：佐世保校合同ゼミ報告会にて活動・調査結果について発表 ・年度末：地域プロジェクト活動における 1 年間の取りまとめ、「2021 年度　地域プロジェクト活動報告書」作成に向けての作業実施～グループごとに調査レポート作成と発表資料修正作業実施
	【卒業論文 4 年生】 **（前期：Q1・Q2）** ・「長崎県立大学　地域プロジェクト活動報告書」作成に向けて、グループごとに調査レポート作成と前年度の佐世保校合同ゼミ報告会資料修正作業実施 ・前年度の活動内容をもとに、活動紹介の動画を収録 **（後期：Q3・Q4）** 10 月、「長崎県立大学　地域プロジェクト活動報告書」発行（11 月、第 2 版発行） 12 月 27 日、「2020 年度サービス・ラーニング活動報告会」が You Tube にて公開

（出所）筆者作成。

2 年目（2020 年度）及び 3 年目（2021 年度）の活動

2 年目、3 年目は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、時期によっては活動自体が制約されることもあったが、地域プロジェクト活動に関する共通認識、理解をゼミ内で共有した上で、関連資料の輪読やフィールドワークを行った。ただし、学年、年度によって、地域プロジェクト活動の進め方が多少異なっていたことをあらかじめおことわりしておきたい。また、秋季以降は KJ 法を用いて、地域課題の洗い出しや気づいたことなどをゼミ生間で議論し、意見を出し合った後、活動計画・調査計画の具体化を行い、2 チームに分かれてグループワークを実施した。その後、相浦地区など、大学周辺の地域課題の中から学生自身がテーマ・トピックを選び、文献調査やフィールドワーク、アンケート調査を実施し、結果の集計、集約を行った。また、アウトプットとしては、各年度ごとそれぞれ、12 月に芳賀ゼミ 2 年・3 年合同の地域プロジェクト活動報告会を実施した他、3 年生に関しては、長崎県立大学佐世保校内で、佐世保校合同ゼミ報告会に参加し、グループごとに活動や調査の成果について発表した。

また、2021 年 10 月には 2019～2021 年度の 3 年間の活動内容を取りまとめた「長崎県立大学　地域プロジェクト活動報告書」を発行した。さらに、2021 年 12 月には、「2020 年度　サービス・ラーニング活動報告会」が You Tube にて公開されている（表 1 参照）。

（3）これまでの取り組みと今後の課題

本節では､地域プロジェクト活動における各年度､各学年の取り組みについて紹介してきた。冒頭でも述べたように、地域プロジェクト活動は単なるフィールドワークや調査の実施を通じて地域課題の現状を整理した第１段階にとどまっているが、本来の目的としては、この第１段階のステップを踏まえて、地域住民の方々や関心ある教職員、地方自治体の方々などに私たちの取り組みを知ってもらい、地域の方々と大学が協働・連携して新たな取り組みに発展させていく（第２段階）ことである。しかしながら、活動を本格化させたい２年目以降、新型コロナウイルス感染症拡大により、ゼミ自体がオンライン授業になるなど、活動の制約があった。それに加え、限られた時間の中で、ゼミにおいて輪読を通じた発表や議論の方法、資料作成、レポート作成といった基本的なスキル向上と地域プロジェクト活動のような実践的な活動をバランスよく進めていくのは容易なことではなく、学生によっては充実感だけでなく負担感を感じたケースもあった。また、地域プロジェクト活動を、Q1・Q2 からじっくり計画的に取り組みたいという感想を述べる学生もおり､地域プロジェクト活動の運営のあり方や時間配分の検討､学生の活動の継続性やモチベーションの維持・向上も今後の課題である。

とはいえ、3 年間の活動の成果が報告書や動画といった形で公表され、形になってきたことは、ゼミの学生達にとっても励みとなっている。一方で、この３年間の中で参加を計画されていた地方自治体主催の環境イベントもコロナ感染の影響により何回も中止・延期を余儀なくされた｡イベント参画に向けて事前準備も行っていたが､学生が地域の人々に活動成果を報告し、知ってもらう機会を得られなかったのはやむを得ない事情があったとはいえ残念であった。サービス・ラーニングの趣旨からいえば、地域の人たちに調査・活動成果を報告し、意見もいただきながら、学生と地域が一緒になって取り組む可能性をともに模索していくことこそ、学生達が地域のことに興味・関心を高め、また地域住民とのかかわりを通じて自身の自己成長につながっていくだろう。今後も引き続き、地域プロジェクト活動を継続、充実させていきたいと考えている。

４．フィールドワークのためのテキスト作成（担当：橋本、岩重、髙、名切元、芳賀）

3 年間の学生との活動の中で、幾つか気付いた点がある。それは、すでにこれまでの経験の中で学んでいると考えられる挨拶の仕方やメールのマナー等が十分ではないことである。最近の学生のオンラインのやり取りは、LINE などに代表されるように短文に終始しており、メールを書く機会さえないのが現状のようである。実際、今回のサービス・ラーニングの活動に参加した学生に、フィールドワークを行うにあたって教えてほしいことや学びたいことを尋ねた結果、電話での応対やメールの出し方など、外部の方との正しいコミュニケーションの取り方を知りたいという意見が多くあがった。そこで、学生の意見に加え、本学の実践科目の一つである「長崎のしまに学ぶ」を担当する教員とも意見交換を行い、フィールドワークのための副読本の執筆を行った。以下、テキストのタイトルと章立てを示す。

タイトル：GO！GO！フィールドワークー大学の外に飛び出そう

第０章　何のためのフィールドワーク？

第１章　フィールドワークに必要なこと
第３章　フィールドワークの問いの立て方
第４章　フィールドワーク活動事例－サービス・ラーニングを中心に

Ⅲ．まとめと今後の課題

今年度は 3 年計画の最終年度の活動となった。3 年計画のうち 2 年間はコロナ禍の影響を受け、学生と十分にかかわることができないまま活動を終了しなければならない内容もあった。その一方で、不自由な状況下であっても自分たちの活動について主体的に考え、学外の方々と積極的にかかわり、目覚ましい成果を上げたものもあった。学生がより主体的に活動するための教員のかかわり方については、これからも引き続き検討していく必要があるだろう。

3 年間の活動を通じて学生たちに学んでほしいことをテキストの形にまとめた。このテキストについては引き続きブラッシュアップとアップデートを行い、学生の指導に役立つ内容に仕上げていきたいと考えている。なお、本活動の 2 年目の内容については、オンラインで報告会を行った。末尾の添付資料に記載した URL から視聴できるようになっており、今後の学生の活動の参考資料としたいと考えている。

Ⅳ．引用文献

飯田昌子（2018）．ゼミ活動におけるサービス・ラーニングに関する一考察　鹿児島大学法学部紀要人文学科論集，85，1-13.

植田和弘・大塚直（2015）『新訂　環境と社会』一般社団法人　放送大学教育振興会。

蟹江憲史著（2020）『SDGs（持続可能な開発目標）』（中公新書 2604）、中央公論新社

環境省編（2020）『令和 2 年版 環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書　気候変動時代における私たちの役割』日経印刷。

白井信雄（2020）『持続可能な社会のための環境論・環境政策論』大学教育出版。

長崎県立大学地域創造学部実践経済学科　芳賀ゼミ（2021）「長崎県立大学　地域プロジェクト活動報告書」（第 2 版）、2021 年 11 月 5 日。

西嶋啓一郎著（2019）『SDGs を基盤にした大学連携型地域貢献』セルバ出版。

福留東土（2019）「日本の大学におけるサービス・ラーニングの動向と課題」『比較教育学研究』第 59 号、pp.120 - 139。

村上周三・遠藤健太郎・藤野純一・佐藤真久・馬奈木俊介　著（2019）『SDGs の実践　自治体・地域活性化編』事業構想大学院大学　出版部。

村上むつ子（2007）．地域貢献活動を学習に“サービスラーニング”の試み　教育学術新聞第 2259 号（https://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2259/3_3.html）

添付資料：報告会動画リンク先

テーマ	URL	QR コード
冒頭あいさつ	https://youtu.be/MeOpAuGcWH0	
相浦地域のニーズ調査に関する報告	https://youtu.be/bnAWHOija7o	
学習支援ボランティアに関する報告	https://youtu.be/QFy-yFkPCTY	
環境保全プロジェクトに関する報告①	https://youtu.be/15_YbFyJWbE	
環境保全プロジェクトに関する報告②	https://youtu.be/srAHEGtRymo	
環境保全プロジェクトに関する報告③	https://youtu.be/rH3OEnNWex0	
外国語誤表記調査に関する報告	https://youtu.be/3v04b_hZOGY	